

彙報

## 農業施設は巨匠の美術館

—風連町（現・名寄市）における巨大壁画の制作—

松岡義和

市立名寄短期大学名誉教授

### 1. 農業用水分水升の現代絵画

ことのはじまりは2002年（平成14年）、私が市立名寄短期大学の学長になったばかりの5月に、風連町役場の農林課長補佐（後の部長）であった寺崎秀一さんが訪れ、農業用水路埋設跡地に立ち上がるコンクリートの分水升4ヶ所の壁面に絵を描いてほしいという依頼があった。

場所は北栄町東4号、25線から24線の町営住宅前の道路沿いで、天塩川から水田に水を取り入れる用水が、危険が予想されるため蓋をして盛り土し、町民のための家庭菜園として利用されることになった。

早速、現地を訪れてみると、埋設後は公園化され、その中に真っ白な高さおよそ2メートル程の立方体が4基点在していた。1基4面の計16面の壁面である。私はとっさに、この分水升には20世紀の抽象絵画が似合うと発想した。分水升の上の鉄の柵やパイプをとりこめば、それはもうモンドリアンの絵そのものである。すると、あと3基はミロ、クレー、ピカソがいい。早速、大学図書館の美術全集の中から、模写すべき作品を選び完成予想図を作製した。農林課は壁画制作のボランティアを募ったところ、風連町町民をはじめ市立名寄短期大学の学生、名寄絵の会、名寄手づくり絵本の会から30名が集まった。

制作日程と作品は次の通りである。

- ・6月1日—ミロ「女、鳥、星」
- ・6月8日—クレー「オリエントの庭」
- ・6月15日—ピカソ「ゲルニカ」
- ・7月6日—モンドリアン「コンポジション」

制作初日の6月1日は雨に降られた。油性のペンキは複雑な混色には不向きなので、ビニール系の水性塗料を使った。そのため農林課の職員が農業用ビニールと青シートで分水升をすっぽりと覆ってくれたので、作業は予定通りに進んだがシートの中は光線が青くなるので、色作りに難儀した。4日間での完成は横暴とされていたが、10時から午後4時までの時間で4面を完成したので、その後の展望は開けた。

そもそも、なぜ私がこれ以後の巨大壁画を指揮するようになったかという、この同じ年に風連町では駅裏に「農産物出荷調整利雪施設」（20号倉庫）改修工事の検討中であつた。わかりやすく言えば、風連町特産のもち米を収穫の翌年の6月まで品質をさげずに貯蔵する倉庫で、そのためには常に倉庫内を5度の温度で保つために豪雪地帯の風連の雪を貯える「貯雪室」を建設する計画であつた。

町役場をはじめ農協からの検討委員、すでに「貯雪室」を研究して沼田町で完成させた室蘭工業大学の媚山教授を加えた会議の座長として、私が選ばれた。私は日本大学芸術学部美術学科の卒業であるから、農業にしても建築にしてもまったく無学の素人であるので固辞したのだが、学識経験者という身分で司会・進行を務めるということで引き受けた。

\*責任著者

住所 〒北海道名寄市西4条北8丁目1番地 名寄市立大学道北地域研究所内  
E-mail:chiken@nayoeo.ac.jp

検討会議の中で提案された「20号倉庫改修工事」の設計図は巨大なもので、22メートル×13メートルという建造物であった。何回かもたれた会議の中で、私は22メートルの西側壁面が道路に面していることから「完成後はこの巨大な壁面には、ミレーの『落穂拾い』を10メートル×8メートルの壁画で描くとよい」と提案したのだ。なぜなら風連の景観が、フランスのパリ郊外60キロのバルビゾン村の農村風景に似ていたからだ。

会議の中には風連町役場の農林課の職員も出席していたので、「貯雪室」建設の前に、そのアイデアを自分たちが当面している、用水路埋設跡地の「分水升」で試してみようとしたのだと思う。この時点では、小室勝治課長も寺崎秀一課長補佐も翌年2003年(平成15年)に、この「落穂拾い」が完成するとは夢にも思っていなかったであろう。

いくつかのエピソードを紹介しておこう。

学長室は事務局の隣の応接室をはさんだところにあったのだが、私の研究室の蔵書のひとつである「絵本」を学生たちの保育実習に使ってもらいたくて、わがままを言って学生玄関の脇の就職相談室と取り替えてもらった。学長室のドアは施錠せずに、いつも学生が出入りできるように配慮した。入口の小さな掲示板に「壁画制作ボランティア」募集の貼り紙をして、名前を記入してもらうことにしたところ、さっそく申し込んできたのが児童専攻の学生たちだった。後に回を重ねて生活科学専攻の1年生たちも加わった。

「貼り紙」には「おにぎり、おやつ、飲み物付き」と書かれていたので、絵を描く興味よりそれにひかれてきた学生の方が多かったかも知れない。

1回目の「ミロ」に挑戦した時、昼食は近くのコンビニでおにぎりや飲み物を私が自費でまかなった。雨のシートの中で食べようとしていたら、小室課長が道路をはさんだすぐ向かいの桜庭忠人さんの庭のログハウスを借りてくれた。すばらしいログハウスで、感激しながらおにぎりを食べた。

このことがきっかけで、学生たちは後に桜庭さんの建設作業場における「焼き肉パーティ」に招待されたり、桜庭さんは翌年からつづくミレーの壁画「落穂拾い」「晩鐘」「羊飼いの少女」の壁画制作作業の足場や、高所作業車の提供など後々甚大な協力者となるのだ。

その後、おやつは風連の名物「もちの里」の大福が支給され、大福などこれまで食べたことのなかった私までも、「もちの里」へ足を運ぶようになった。それほど3時のおやつの大福はおいしかったのである。

手元に、柿川町長名と農林課が配布した貴重な文書が何通か残っている。それによると、この分水升の壁画制作の事業は、「てしおがわ土地改良区」の事業として進められ、梅津和昭理事長の名前も見える。

用水路の埋立跡地は、土地改良区より町が土地を借り受けて、平成16年からは町民の家庭菜園として解放された。その折の町民の割り当ては抽選によって行われたのだが、土地の呼称に「ミロの1番」とか「クレーの2番」というように割り当てられたのだ。町営住宅の住民が、道端で会話しているのを耳にした私は思わず笑ってしまった。

「あんたのどこ、どの辺にあたったの」

「うん、ピカソの3番よ」

「わたしとどこ、ミロの3番よ。ポンプがあるから水遣りにすごく便利」

空き地を利用した市民の菜園は日本中にあるだろうが、「ミロ」とか「ピカソ」とかいう名称を使った菜園が他にあるだろうか。これまで「ミロ」という名前は知らなかった町民も多くいたはずである。「ピカソ」は知っていても、それが住民の挨拶代わり



に「クレー」も「ピカソ」も出てくるのである。なんて愉快的ことだろう。

小室課長（後の副市長）によると、苦情の投書もあったようだ。それは「ピカソのゲルニカ」の分水升の近くの住人からで、「朝晩毎日ゲルニカを目にするのは、気持ちが悪い」と言うのだ。当然のことだと思う。「ゲルニカ」はスペイン北部の小さな古い村で、スペインの内乱でフランコ将軍に味方したドイツの飛行機が無差別爆撃をして、2000人の死者を出して村は壊滅した。1937年4月26日のことである。

同年、パリ万国博覧会に、ピカソは抗議を込めて「ゲルニカ」の大作（3.51メートル×7.28メートル）を発表した。今はスペインのマドリードの文化センターに陳列されていて、私も見ている。絵は大きいので「分水升」には4分割して4面に描いた。この壁画に力を入れてくれたのは、すぐ近くに住宅のある画家の牧野栄三さんである。分解した絵画の模写なのに、戦争そのものを描いている訳ではないのに、ピカソの絵からは戦争の悲惨さが伝わってくる。

打ち上げの「除幕式」は6月15日午後4時から、このピカソの「ゲルニカ」の前で行われ、柿川町長、梅津理事長によって白布ははずされた。その後、記念撮影をして「母と子と老人の家」で、制作に参加した人たち全員で「打ちあげパーティ」が行われた。日程の都合で、モンドリアンの「コンポジション」は7月6日に完成した。今でも雪解けの5月には、風雪で傷ついた部分の修復メンテナンスは大学の学生によって行われている。

## 2. 「貯雪室 20号倉庫」はミレーの「落穂拾い」

2003年（平成15年）に「貯雪室 20号倉庫」の改修工事は完成した。前年の検討会議の中で、道路に面した壁面にミレーの「落穂拾い」の大壁画を描くことは、一つのアイディアとしては提案していたが、いよいよ計画は具体化してきた。

5月6日付で風連町役場産業課農政グループ担当者から送られてきたFAXがある。

「雪氷施設の壁画について」

上記について、4月30日の風連町農業振興対策会議におきまして承認を受けました。目的は「雪氷施設に壁画を描きながら、地場製品のPRを行う」というものです。また、(財)北海道市町村振興協会の補助を別紙の内容で申請しております。

事業名は「ふるさと再発見事業」で、『田園の中の美術館』として72万円を申請したことがわかった。

早速、壁画制作の参加者を一般から公募したが、昨年参加した市立名寄短期大学の学生が、いち早く18名応募してきた。制作日程は次の通りである。

- ・ 5月30日（日）ミレー「落穂拾い」壁画の原画づくり
- ・ 6月6日（日）現地20号倉庫に下絵描き、10時～4時
- ・ 6月13日（日）彩色作業開始、10時午前中町民ボランティア
- ・ 6月20日（日）彩色作業のつづき、10時午前中町民ボランティア

制作の主力メンバーは名寄絵の会、名寄手づくり絵本の会で、それに市立名寄短期大学の学生と、風連町の小学生を含む町民ボランティアが参加し、その数は85名になった。仕上げは高所作業車によるので、作業には2名しか乗れないので、名寄絵の会、絵本の会の8名が7月4日に1日時間をとって作業に当たった。高所作業車に乗ったのは谷紀美子さん、大田由美子さんである。役場職員は日曜日返上で裏方に徹してよく世話をしてくれた。

よって合計5日間で、横10メートル×縦8メートルの大壁画を完成させたのである。



たった5日間で完成させるには周到な計画が必要であった。私はかつて、網走管内の小清水中学校の美術教師をしていたが、1960年(昭和35年)から授業の中で「壁画」と取り組んできた経験がある。初めは180センチ×90センチのベニヤ板2枚の大きさの壁画を2年つづけたが、その後は中学校の屋内体育館の正面全体をうめる大壁画を毎年制作して新しい壁面と取り替えていた。

これはB4の用紙に原画を印刷し、その原画に5ミリの間隔で方眼の線を入れ、同じように全紙の模造紙にも方眼の線を入れて拡大するというもので、地図を描く方法を採用した。作業は床面で行い、何十枚もの出来た模造紙大の絵を梯子をつかって順次壁面に画ビヨウではっていくという方法だった。当時はまだOHP(オーバーヘッドプロジェクター)という教育機材がなかったが、今回はOHPが大活躍した。

作業の手順を簡単に説明しておこう。

- (1) 体育館の壁面に、実物と同じ原寸の紙をはる。
- (2) その上に農業用ビニールをかぶせる。
- (3) 体育館を暗くして、OHPによってミレーの「落穂拾い」のカラーコピーを拡大して、壁面に投影する。
- (4) 梯子、脚立をつかって投影されている原画の形を油性ペンで描写する。
- (5) 農業用ビニールを床におろし、下にベニヤ板を敷いて、金槌と穴開けポンチで、油性ペンの輪郭線の上を5センチの間隔で穴をあけていく。



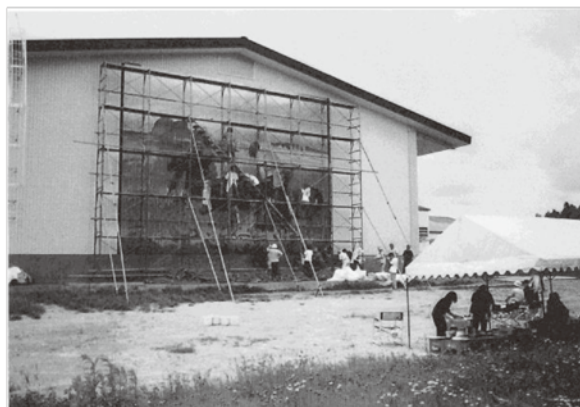
室内の作業はここで終わり、農業用ビニールを丸めて20号倉庫の現場へと運ぶ。1日目の作業はここまでであるが、この方法を思いつくまでにはかなりの日数を必要とした。後でわかったことだが、15世紀のイタリアルネサンスにおけるミケランジェロのローマ・バチカンの「シスチナ礼拝堂」の天井壁画も同じ方法がとられたことがわかった。当時はビニールがなかったので、床上で紙を貼り合わせて、あの「アダムとイヴ」をはじめ旧約聖書を絵にしたのだ。それから、その線上に5センチ間隔で穴をあけてから天井に張りつけて、油性ペンはない時代なので、デッサン用の

木炭を刷り込んで点を描き、紙をはがしてから点と点をつないで形を描いたのだ。私とまったく同じだったことに、自分で自分に感動した。私は巨大なビニールをバトンで壁面の軒下に吊るし、下から順に巻上ながら油性ペンでポンチの穴を埋め、点と点をつないでいったのだ。

何よりも感動したのは、点と点の間が5センチだったことがミケランジェロと一致したことだ。3センチでは、穴だらけで壁面に吊した時にビニールはぐにやぐにやになってしまう。また、10センチでは離れ過ぎて交差する線をどの線と結ぶのかが分からなく、形を描くのに混乱がおきてしまう。それで5センチにしたのだ。紙を使ったミケランジェロも同じく5センチにしたのだ。

ポンチの使い方も、金槌が弱いと穴が開かないし、強過ぎると下敷きのベニヤを通り抜けて体育館のフロアに傷をつけるし、なかなか技術が必要だった。この作業に特技を発揮したのは小室課長で、小室課長の指導を受けての作業でまたたくまに大壁面の穴開けは終わった。

作業中の笑い話がある。下敷きのベニヤが足りないため、作業の終わった部分で「板ずらしていいですか」と、



声をかけ合うのだが、日本語はむずかしい。「いたずらしていいですか」と聞こえた短大生が、びっくりして戸惑う場面もあって大笑いするシーンもあった。

20号倉庫の壁面には高さ10メートルの作業用足場が組まれ、危険防止のために、緑色のネットも張られた。このため、黒の輪郭綿を描き終えるところまではスムーズに作業は進んだが、いよいよ彩色に入ってから全部緑色に見えてしまうので、地上で混色して、「この色で右の女の人のスカーフを塗ってください」「これは顔の色です」と指示をしてから作業台に行かなければならなかったし、時々ネットをはずして色合いを確認しなければならなかった。私は20メートル離れた場所から、常に全体を見ながら大声で指示しなければ、巨大過ぎて作業をしている人が、今、どの部分に彩色しているかわからなくなることもあった。

特筆すべきことが2点ある。

その一つは、この作業の様子が新聞で報道されて、旭川の匿名の方から大学に電話がかかってきて『落穂拾い』の麦は、大麦でしょうか小麦でしょうか」という質問があった。私は1990年にミレーのアトリエのあるパリ郊外60キロのバルビゾン村を訪れている。しかし、それは1月のことであり大麦か小麦かまではパリのオルセ美術館で原画を見ながら考えたこともなかった。実は後に大麦であったことが分かるのだが、その時とときに「パンをつくるための小麦でないですか」と答えたことを後々まで後悔したが、匿名だったために連絡の方法もなかった。



このことがわかったきっかけは、彩色の作業中に名寄手づくり絵本の会の伊藤薫代さんが、原画のコピーをもってきて「私はこれから真ん中の赤いスカーフの女の人が手に持っている麦を描きに行くのですが、どうも麦の穂には見えないのです。これは麦の束でないでしょうか」と言った。

「落穂」というのは麦刈りが終わったあとで、運んだあとに残った麦の穂がもったいないので拾って歩くのだが、束ごと落ちてることがあるのだろうか。たしかにそれは麦の束だった。

いくら原画を見ていても、そこまでは見ていない。それに遠くの農夫たちは上も下も白一色の作業着を着ているのに、この絵の主人公の3人の女たちは、スカーフも着ている服も色が違う。

もう19世紀半ば頃の自然主義の画家たちの絵からは宗教とは無縁の、バルビゾンあたりの農民の姿そのものを描いていると頭から信じていた。美術全集を何冊か手にして「落穂拾い」の解説を読んでみても、聖書のことにはふれていなかった。しかし、もしかしたらと思って旧約聖書を調べてみたのだ。

「あつた！ルツ記だ」

あらずじはこうだ。ルツの2人の息子が死んで、2人の嫁にルツは自分はエルサレムに行くので自由になるようにと告げる。ところが2人の嫁は「私たちもお母様と一緒にエルサレムへ行きます」という。それで3人の女性が描かれているのだ。旅の3人は落穂を拾っていたところ、親切な地主が使用人たちに「もっと大きな束を落としてやりなさい」と言うのだ。しかもその麦は大麦であることも聖書に出ていた。19世紀半ば頃になっても、ヨーロッパ絵画というのは聖書からは完全に脱却していないことを知った。

次の週、伊藤薫代さんには麦は束であることを伝えて、絵を修正し完成させた。「落穂拾い」は、私の美術教師としての研究の上でも大きな収穫を得た。1日中、10時から夕方4時まで「落穂拾い」の複製画を5日間で30時間も見ていたのだ。背景には29人も的人物が描かれていることがわかった。「名画との対話」というのだが、絵は目に写っている状態から、見える状態になり、更に見て分かる、見抜くというように、自分の認識力もより深く、より高くなっているのだ。それが「感動と認識」である。楽しくもあり、また深く学習する機会を得た「落穂拾い」の壁画制作であった。新聞やテレビでも大々的に紹介され、「農業新聞」によって全国に紹介され、20号倉庫は風連の観光名所にもなり、制作過程は絵ハガキとして販売された。







壁面捜しがはじまった。いくつかの候補地があったが、駅裏に集中させて風連壁画鑑賞のためのロードマップをつくることも検討された。その結果として選ばれたのが、B&Gに隣接する「風連町農村環境改善センター」であった。この施設にはトレーニング用の小体育館もあって、南側壁面が道路駐車場に面していた。壁面に凹凸があり、通風用の器具も取り付けられていたが、それらも絵の一部として塗りつぶしてしまうことを考えれば、制作は可能だった。「落穂拾い」を完成した時点で、次は「晩鐘」と決めていた。そして、「分水升」は例外として風連町の農業施設は全部ミレーで統一しようと考えた。「羊飼いの少女」、「種まく人」、「春」、「はぐくみ」と、名作はいくらでもあった。

市立名寄短期大学は2年課程なので、これまでの壁画制作に参加した学生は卒業していったが、新しく1年生が入学してきたし、壁画制作の楽しさを忘れられずに、近隣に就職した卒業生は土曜日から宿泊して名寄に集まってきた。制作の中心になったのは、「名寄絵の会」と「名寄手づくり絵本の会」の女性たちだが、いっさいの準備、後片づけ、学生の輸送は役場職員と「ピカイチふるさとを創る会」の有志たちがあつた。スケジュールは、次の通りである。

- ・ 6月4日（土）「晩鐘」をOHPで投影して原画づくり（大学体育館）
- ・ 6月5日（日）現地、農業生活改善センターの壁面に下絵描き
- ・ 6月18日（土）彩色作業、午前班、午後班、終日班の3班編成で10時～3時まで
- ・ 7月2日（土）彩色作業のつづき
- ・ 7月3日（日）高所作業車による仕上げ  
 除幕式、打ち上げ午後3時から「晩鐘」の作品の前で

私をはじめパリ郊外60キロのバルビゾン村を訪れたのは、1990年のことだが、それから3年後の1993年にもう一度バルビゾン村を訪れている。この時は4年に1度という雪に見舞われたが、前回の霧とはちがってシャイイの教会の尖塔が見えた。勿論、シャイイの教会まで足をのばしたが、そのおかげで冬とはいえ「晩鐘」の風景をこの目で見る事ができたのだ。夕陽を背に合掌している2人の農夫のむこう、地平線のはてにシャイイの教会が見えている。あまりにも有名な作品であり、その原画はパリのオルセ美術館で見ている。



しかし、この巨大壁画と取り組むまで、季節がいつなのか、収穫している畑の作物は何なのかを考えてもみなかった。「落穂拾い」の時と同じように、この名画を単に目に写していただけに過ぎなかったのだ。

制作を進めていく上で、畑の上どころがっているのはじゃがいもで、それを掘るための3本鍬があることを知った。貧しい2人の農夫が履いているのは木靴だった。一つ一つ仕上げて行く中で、今まで見ていて見えなかったものが見え出した。じゃがいもを仕上げたのは小室課長で、その技法を学生たちが習って描いた。



シャイイの教会を仕上げたのは風連町の画家の牧野さんで、常に一番高い作業台の上で空と夕焼け雲を仕上げたのは谷紀美子さんである。

「色作りの職人」とあだ名されたのは大田由美子さんで、原画のコピーを見ながら、次々と複雑な色を混色し、その絵の具を小皿にもらって学生たちは中段、下段の彩色におもむいた。

幸せなことに「晩鐘」は雨に合うこともなく、予定通りの日程で進んだ。

昼食の1時間がまた楽しかった。沢山の種類のコンビニおにぎりから2個を争って選ぶのも楽しいし、この2個のおにぎりがこんなにおいしいと感じたこともなかった。さらに11時にはシュークリームが、3時のおやつには豆大福が「ピカイチふるさとを創る会」の好意で支給されるのも楽しみのひとつだった。

2年間の短い期間ではあるが、ふるさとを離れて名寄で過ごした学生たちにとっては、町民と交流し、しかも巨大壁画を完成させて感動の中で時を過ごしたことを生涯忘れられぬ思い出となったことだろう。

後日談になるが、西向きの壁面に描かれた「晩鐘」は西日の照り返しが強くて、夕陽の色がとんでしまい、2年後に修復のメンテナンスをしなければならなかった。その都度、高所作業車を出してくれたのは桜庭さんであり、運転手は山田さんであったことを感謝を込めて特筆しておかなければならない。